

膜シンポジウム2021報告

実行委員長 新潟大学 田中孝明

膜シンポジウム2021を2021年11月16日（火）・17日（水）の2日間、オンライン形式にて開催しました。口頭発表15件、ポスター発表57件の発表申込みをいただき、127名の方がご参加くださいました。ご発表・ご参加・ご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

本年度の主題は“膜が分かる・膜で分ける・膜で分かる”としました。人工膜・生体膜・境界領域における膜の研究が基礎から応用まで、情報共有と議論をしていただくことで、“膜学”をさらに発展させることを目的としました。

当初は膜シンポジウム2021を神戸大学で開催させていただき計画でしたが、新型コロナウイルスの流行が続いたため、7月にオンライン開催に変更させていただきました。発表会には膜シンポジウム2020・第43年会と同様に化学工学会のGOING VIRTUALのシステムとZoomミーティングを、懇親会（オンライン型交流会）には第43年会と同様にSpatialChatを利用しました。GOING VIRTUALの運用に関しては早稲田大学と芝浦工業大学の学生アルバイトと指導教員（松方先生・酒井先生、野村先生）の方々に大変お世話になりました。SpatialChatは実行副委員長の小暮先生に運用していただきました（今回、学生交流会用サブルームを新設）。各システムについては、第43年会の実行委員会の方にノウハウをご教示いただきました。

今回、一部のセッションでハイブリッド型発表会を試行しました。国内で新型コロナウイルスの流行が始まった2020年からは他の学会でも研究発表会のオンライン開催が主流です。感染防止のためですが、研究発表会では対面型の交流も望まれます。一方、会期中に現地参加できない場合でも、ハイブリッド型発表会でしたら、研究室などから発表・参加が可能です。具体的には1日目の最後のセッションと2日目の最初のセッションでは東京都内の大学の発表者・座長の方に早稲田大学の会場（121号館会議室）に

お越しいただき、化学工学会分離プロセス部会からお借りしたハイブリッド型発表システムで口頭発表・座長をしていただきました。Room 1ではハイブリッド型発表システムを全セッションで使用しましたので、口頭発表はすべてハイブリッド型発表システムで行ったこととなります。オンラインの質問に加えて、早稲田大会場の参加者からの質問も会場マイクを用いてスムーズに行えました。今回の試行の経験を今後の年会・シンポジウムに活用していただければ幸いです。

運営面では、1日目の第1セッションから参加されようとした方がセッションに入れなかったこと（その後、解決方法がわかりました）や懇親会での配信が過負荷となり、三賞〔演題登録・要旨提出・参加登録が早かった方への賞〕の表彰式が行えなかったこと（閉会式でダイジェスト版を掲示させていただきました）などをお詫びします。

2日目の最後には、学生賞のオンライン表彰式が行われ、つづいて、岡村恵子会長のお言葉で膜シンポジウム2021の幕を閉じました。多くの方々のご支援でシンポジウムを実行できたことに感謝しております。膜シンポジウム2021でのご発表・ご参加が皆様のご研究のさらなる発展のきっかけとなることを祈念します。

実行委員会

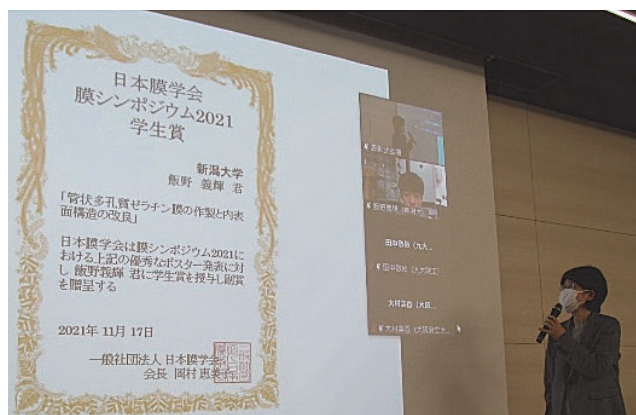
実行委員長：田中孝明（新潟大学）

実行副委員長：小暮健太郎（徳島大学）

実行委員：池田義人（神戸薬科大学）、大園瑞音（徳島大学）、大橋秀伯（東京農工大学）、酒井 求（早稲田大学）、中川敬三（神戸大学）、中瀬生彦（大阪府立大学）、野村幹弘（芝浦工業大学）、福田達也（和歌山県立医科大学）、松方正彦（早稲田大学）



ハイブリッド型発表会場



学生賞表彰式